

ロータリーの水と衛生月間

今月は、ロータリーの水と衛生月間となっています。「友」では、ロータリーの奉仕がシカゴ市への公衆トイレの寄贈に始まったとあり、トイレの特集がありました。龍野クラブ・エリアの住民にとって水の問題とは、揖保川の「豊堤」の歴史が物語る様に数年毎の水害であって、水と衛生の問題はピンと来ませんが、能登被災地での悲惨な状況が伝えられると人類の問題として再認識致します。

国連の2020年のデータによれば、世界の10人に3人は安全な水の利用が、また、10人に6人が安全な衛生施設が利用できないと報告されています。また、毎日3,000人以上の子供が水に困り亡くなっていると報告があり、今後も、気候変動により4人に一人が慢性的水不足になると予測されています。

ご周知通り、東南アジア等の河川の様はその儘では飲料に適さない国は数多あります。日本では、非常時を除き水不足や衛生面、水質などは問題ないですが、水に関しては、近年、度重なる水害や不法な水源の買占めや、汚染の風評被害、温暖化に因る水産資源の変容等の問題があります。

世界の水問題は、1977年の国連水会議での「1980年代を国際水供給と衛生の10年とする」決定に始まり、更に2015年にSDGsの第6目標として「すべての人々が水と衛生施設を利用できるようにし、持続可能な水・衛生管理を確実にする」ことが示されました。

ロータリー財団の7つの重点分野にも、「きれいな水の提供」があり、多くの国の悲惨な現状を踏まえ、「ロータリーは持続可能な水と衛生システムを開発・維持する能力を地域社会に与え、そして水と衛生に関する研究を支援する」とあります。

更にRIは、水に関する深刻な脅威に対処するには淡水生態系の回復が不可欠と認識し、ロータリーが、地域の水路を回復・保護できるようにする為、2023年に国連環境計画（UNEP）と協力して、「淡水保全の為にコミュニティアクション」を始めました。

たつの市は、地下水を利用しているので、水の枯渇や水質も心配無いとする一方で、鮎を始め自然生態系は確実に後退しています。RIの「淡水保全の為にコミュニティアクション」では、ロータリーが、地域のコミュニティと密に協力して、淡水の回復と保全に取り組み、環境を改善する行動を求めています。ロータリアンが、地域と共に常に環境問題を真摯に考えることこそが肝要かと思えます。

作家司馬遼太郎は、龍野城主脇坂家についての中編小説「貂の皮」の中で、揖保川の清流に触れていますが、この清流を護ることは地域の我々の責務と改めて認識する次第です。